現代日本社会の規範の矛盾構造

——摂食障害の事例を手掛かりとして——

加藤まどか

本稿は、摂食障害を経験した個人が語る言葉や手記を見ていくことを通して、現代日本社会の規範の矛盾構造を抽出することを試みたものである。家庭・学校・職場という個々の社会的な場において、個人が、主体性・女性性・身体性をめぐる規範の矛盾に直面させられ、さらにこれらの規範の矛盾構造を個人が<主体化>させられるメカニズムが働いていることが明らかにされる。

1　序

摂食障害は、「拒食症」(1) と「過食症」(2) を中心とした病であり、日本では、1960年代頃から現れ始め、1970年代、1980年代と急激に増加した。(3) 性別では、男性例は約1割と報告され、若年層の女性に圧倒的に多いといえる。(4)

この論文では、摂食障害を経験した個人へのインタビューや手記などを見ていくことで、現代日本社会に共通する構造を見ていくことを試みる。(5) インタビューでの語りや手記には、個人が規範の矛盾を感受していることが現れていた。この規範の矛盾を、より抽象度の高い水準で記述すると、主体性／女性性／身体性をめぐる規範の矛盾構造として整理することができる。現実の場面では、それぞれの規範の磁場は異なる強さで働き、異なるバランスで規範の矛盾が生じていると考えられる。摂食障害の個人は、規範の矛盾をより強く感受し、それが「食」と自己の「身体」を通じての、病としての表現へとつながっていくと推測される。摂食障害は、病の形態の特殊性と、今日における急激な増加から、現代日本社会において、諸個人がその中に置かれている社会的な構造を見るのに適した素材であると考えられる。

摂食障害は、医学的な領域では、本人の心理的な要因が強く関わった病であり、生まれ育った家族を中心とした情緒的な人間関係が影響し、かつ、社会的な要因の影響もある病と考えられてきた。摂食障害の医学的な解釈は、以下の7つに整理出来る。①生物学的観点 (6)、②精神力動的解釈 (7)、③行動理論モデル (8)、④認知行動論的モデル (9)、⑤家族システム論 (10)、⑥嗜癖モデル (11)、⑦社会文化的解釈 (12) である。

社会的な要因を視野に入れて摂食障害を論じた研究としては、①オーバック (13)、②ホワイト夫妻 (14)、③斎藤学 (15) の研究がある。加藤秀一は、拒食症の基盤には、女性が〈従属〉に向けて、〈主体化〉に挫折し続けるという構造があると主張する。(16) 浅野千恵は、「社会的

実践の場で使用される性別カテゴリー」という意味で「ジェンダー」という概念を用い、「ジェンダーという知が、どのように摂食障害という個々の女性達の経験の中で用いられ、かつ摂食障害という現象全体を形作っているのか」を論じている。[17]

2　主体性をめぐる規範の矛盾構造

以下２～４では、摂食障害を経験したＡさん、Ｂさん、Ｃさん、に対する筆者のインタビューにおいて語られた言葉を中心に見ていこう。[18] [19]（以下のインタビューでは、筆者の言葉は、－以下で示している。（　）内は筆者の補足である。下線は筆者が引いたものである。）

２では、Ａさんのケースを中心に見ていこう。Ａさんは、30歳前後の女性である。女子校に通っていた高校１～２年生の時に拒食を経験した。

Ａさんは、当時孤独であり、集団にうまく入れなかったことを、拒食と関連させて語っている。孤高に憧れ、孤独に行を積むような生き方を選ぼうしたことが、拒食につながったのではないか、とＡさんは振り返っている。

Ａさんは、また、当時充実感がなかったことも、自分を拒食に導いたのではないかと感じている。Ａさんの拒食は、高校３年の頃には止まっている。しかし、以下に現れている問題を、Ａさんは、現在にまで続くものとして位置づけている。

拒食していた当時、内科の医者を受診した時のことをＡさんはこのように語る。

Ａ、うん、それで覚えているのは、病院の先生に、だからダイエット以外、ダイエットって言わなかったかな、とにかくなんか、楽しいこととか、趣味とかはないのかって言われて、「なんにもないです」と答えた。なんにもなかったんですよね。だから、趣味とかあればいいんでしょうね、きっとなんかほかに。なんかそれが生き甲斐みたいになってきちゃうから、ああいうのって。「何にもない」とかって、「生きていても面白くない」とかって。…<u>切実に面白くなかったんでしょうね、</u>きっと。

このような「切実な面白くなさ」の中でＡさんは大学を受験し、トップクラスの大学に合格する。Ａさんの通っていた女子校は有名な進学校であった。

Ａ、何か空疎な感じがするっていうか、だからってやっぱり、<u>勉強しないでいられる環境じゃない</u>と思いません？なんとなく、ほんとに落ちこぼれにはなりたくないし。あの中にいたら、勉強するじゃないですか、最低限は。…

Ａさんは大学や大学院でずっと勉強を続けてこられた。現在は、仕事を探している。

－一番なされたいことは、どういう関係の…
Ａ、美術館とか、まあ、芸術に関する…
－ああ、そうなんですか。
Ａ、だから、それを自分でやらなくても、そういう雰囲気のある職場っていうのが、一番いいんですけど、それが一番大変なんで（笑い）、あの学芸員とかも、司書よりも求募がないし
…
…
Ａ、やっぱり、Ｄ大（Ａさんの進んだ大学）の人とかって、結局管理職候補としてやってもらわなければ困るみたいに見られるみたいです

ね。他の就職活動してても思ったんですけど。でも、だから、私はそうじゃなく、ね、もうちょっと、まあ自分の時間が取れる仕事とかいう感じがいいと思っていたので。そんなあんまり集団の中心になりたいとは、思ってなかったんですけど…

…

A、…なんか私は、はっきり言って苦しい選択をしたかも知れない、とか思って。えーでも他に行ったってうまくいかなかったかも知れないから、自分の問題なのかもしれないんですけど。

美術への志向は子供の頃からあった。しかしAさんは、美術系の中学に入ることを止めて受験校に進んだ。

A、…やっぱり人に評価されるのって大きいじゃないですか、思春期って、それなりに大学とか入って。もしくは美術系の中学に入るとかいう話もあったんだけれど、そっちは止めて。でもそういう風にしていれば、そっちの方があってたかなとか。やっぱり自分の適性っていうのが、そういう受験校に入ってあってたかどうかもよく分からないし。だから要するに学問までいかないけど、そういう知識の習得が主な意味をなすようなのが良かったかどうか、私には分かりません。…ほかの才能も無かったのかもしれないけど、それはやってないと分からないから、あったかもとか思えるわけですよね。…だから私は受験が大きかったという総括の仕方を一応しているんですけど。つまり余裕が持てない。私はあの状況では、余裕を持って勉強するだけの能力はなかった。それでも余裕持ってる人もいたから。でも私は一応、与えられたことを真面目にやりたいっていう性格があったから、そういう人にとってみれば、もうちょっと余裕があってほめられるぐらいの方が、で、好きなことやる時間も持てる方が豊かな人生だったかもしれないと思うんですよね。…今もなんか分からない。一応学問的って呼ばれるのが近いような場で、ずっと来たってことが、本当にあってるっていうか、充実したことだったのか。

－中学の時に美術系の学校を止められたのは、ご自身で決められたんですか。

A、やっぱり学問の方に価値を置いたんですよ。それに世間的にもそっちの方が高いっていうの、あったんじゃないですか、小学生ぐらいだと。何か頭がいいっていうことに対する憧れが強かったから、アインシュタインとか、だからああいうのに努力すればなれるって思ったりするじゃないですか。でも適性としては、それが良かったのかどうか。

Aさんは、自分が興味のあった美術の道に進むのを止めて、受験校に進みトップクラスの大学に進学したことを、世間的な評価に影響された選択であったと意識している。そしてその選択が、自分にあっていたのか、自分にとって充実したことだったのかと自問している。拒食は高校2年の終わりには止まったが、Aさんは、現在もこの自問を続けている。

ここでのAさんの言葉の中に、主体性をめぐる規範の矛盾を読みとることができる。受験校に入ったこと、またトップクラスの大学に進学したことが、自分にあっていたのかどうか分からないとAさんは語る。Aさんは、このような進路を選択したことを、「苦しい選択をしたかもしれない」と言う。Aさんのこのような語りかたは、「自分の生き方（Aさんの場合、具体的には自分の進路）は、自分が自由に決めることが出来る」ということを前提としてなされている。このような前提があるからこそ、その選択が良かったかどうか、という自問がなされる

のだ。ここで前提とされている内容を、「主体的であれ」という規範、すなわち「人間は自分がどのような価値に従って生きるか、その価値基準を選択することが出来る。」という規範として取り出すことができる。

Aさんは、自分の進路を自分で選択した。しかし「人に評価されるのって大きい」「世間的にもそっちの方が高い」という言葉に現れているように、振り返ってみると自分の進路の決定は、世間的な評価に影響された選択でもあったと意識されている。Aさんが感受した世間的な価値評価は、頭がいいことに価値があり、受験校に進学しそれなりの大学に入ることに価値があるというものである。

この選択によって、Aさんは受験校での生活に引き込まれる。Aさんの真面目な性格もあって、そこでは余裕がなく、好きなことをやる時間が持てなかった。内科医に対して「生きていても面白くない」という言葉が出てしまうような毎日であった。他のことをやりたいと思っても、受験勉強をしないでいられる環境ではなかった。大学受験の結果、トップクラスの大学に入ったが、そのこともAさんは自分にとって良かったかどうか分からないと語っている。

今日では、「個人は自分がどのような価値に従って生きるのかを、自ら選択することが出来る」ということが、前提とされている。「主体的であれ」「自分が従う価値基準を自ら選択せよ」という規範が働く中で、個人は自分の生き方や進路を選択する。自分に最も良かれと思ってなす選択は、多くの場合、世間的な評価に影響されている。そしてAさんのケースに見られるように、そのように選択することが、現実の条件の下で、結果的には自分の生きる充実感を奪ってしまう場合がある。今日の社会の現実は、個人に「主体的であってはならない」と強いるのである。「主体的であれ」という規範が働く中で、「主体」であろうとすることにより、その裏側から絡めとられてしまうような構造がAさんの言葉には現れていた。このような主体性をめぐる規範の矛盾構造を、この論文での考察の第一番目の軸として取り上げておこう。(20)

3　女性性をめぐる規範の矛盾構造

3では、Bさんのケースを見ていこう。Bさんが拒食になったのは、美大を受験するために予備校に通っていた高校3年生の頃のことである。準備を始めたのが遅かったBさんは、自分より実力がずっと上の人達の中でやっていかなければならないというプレッシャーから、次第にものが食べられなくなっていった。美大には合格したが、少しでも食べ過ぎると気分が悪くなる状態が続き、体重が減っていった。行動療法のE病院に入院し、体力的についていけなくなって美大を中退した。Bさんは、その後家族を含めた面接治療を行うFクリニックに通い、数年かかって回復していった。

まずBさんが、自分の受けた治療について語る部分から見ていこう。

B、その時（E病院に入院した時）は、もう（E病院の治療を受け入れるという）誓約書、書いてましたから、もうどうにもならないので、…自分でも無理をして、…なんとか（体重が）38キロぐらいまでいって病院を出たんですけれども。ただ二度と来るもんかと思いましたけれどね。…だからそれが、すごく私今でも疑問なんですよね。だから、こういう形で（筆者に）ご協力したいなって思ったのも、やっぱりそういう治療じゃちょっといけないんじゃないかなっていう。…それで、この一番最後の面接治療

（Ｆクリニック）の時には、ただ行って、あのしゃべるだけなんですよ。…その時には、先生から食べろなんて一言も言われなかったんですけど、それでも治ったんですよね。だから、すごくそういう治療っていうのは大切だなと思うんですけど。
ーああ、じゃあＦクリニックの治療は、ご自身にとってとてもいい…
Ｂ、ええ、これで多分治ったんじゃないかなって思ってます。…で、やっぱり私の方も話してすごく楽になるっていうか。うまく引き出してくれるっていうか。…すごく上手に、やっぱり先生プロですから、お話聞いて下さるんで。それでやっぱり、その家族の問題とか、あと私、妹がいましたんですけど、妹との関係とか、そういうことすごく鋭くつかれまして。やっぱりそういうことが原因だったのかなって思いましたけどね。私が長女なものですから、わりとこう親の期待を背負っちゃっているところがあったんですよね。私は親の言うことを聞く子でしたし、妹は逆にすごくもうやりたい放題、やってましたから。もう流行の洋服は買い、遊びに行き、ええ。で、私は逆に羨ましかったんです。そこまで羽目を外せなかったんですよね。…だから逆に、そういう妹みたいな性格だったらならなかったんじゃないかなっていう気がするんですけど。それは、やっぱりこの先生に通って分かってきたところですね、ええ。

「何が拒食の原因だったか」と問うことは、この論文の目的ではない。大学に入ってからも、なぜ拒食が続いたのかは、当時Ｂさん自身にもよく分からなかった。以上のＢさんの言葉から読み取れるのは、Ｆクリニックでの治療から引き出された家族や妹との関係についての洞察が、Ｂさんの回復にとって有効なものだったということである。当時を振り返るＢさんの言葉は、Ｆクリニックの治療の影響を受けたものだということに注意する必要がある。ただしＢさんが、与えられた解釈を無批判に受け入れているわけではないことは、家族について以下のように語るＢさんの言葉に現れている。

Ｂ、そうですね、（両親は）仲もいいですね。その点では、前もその病気の時に、家族に問題があるんじゃないかっていう（ことが言われたけれども）…家庭には、両親とは全然問題がなかった。妹もそういう自分と合わないっていうことはあったんですけど、妹も真面目に学校に行ってましたし、ちょっと私より羽目を外す程度で、すごく家族としては幸せな家族だったと思いますね。

拒食になり体調を崩すまでのＢさんは、バリバリのキャリア・ウーマンになりたいと思っていたという。
Ｂ、…そんなに真剣に考えたんじゃなかったんですけど、ちょうど…その頃キャリア・ウーマン志向みたいなところが、…女性がもっと外に出て仕事をしましょうみたいなところが、ちょうど言われていた時期だったので、それに乗っちゃったみたいなところ、あると思うんです。…あと母親がまあ主婦で、うちのことちゃんとやってたんですけど、全く外に（働きに）出ない人だったんで。…私は前からこう、わりと出て歩くのが好きな方でしたから、ちょっと私は、あの、うちの母親のような生き方はできないんじゃないかなと思って。あとやっぱりその若さで、女も働かないと男に負けちゃうわ（笑い）みたいな所があって、そういう生意気な気持ちがあって、そういうことだと思うんですけど。

この言葉には、女性も仕事をする方がいのだと、当時Ｂさんが感じていたこと、そして今から振り返ってみると、それは当時の社会的なメッセージに影響されていたと思われることが現れている。しかし、このキャリア・ウーマン志向は、体調を崩したことで揺れ始める。Ｂさんは、当時の日記（Ｆクリニック受診前）に、以下のように記している。

「…というわけでこの経験（Ｅ病院への入院）から、私の将来に対する考えが少し変わってきたみたい。まず結婚したら、おかーさんのような母親になりたい。そのためには、専業主婦もいいなーとか思ったりして…。今までは絶対仕事は止めたくないと思ってたけど。…私ってあまり体に無理がきかないみたいでグラフィックデザイナーなどというハードな仕事をやっていけるかどーか心配になってしまった。…もしかして、私って主婦向きなのかなあとか思ったりして…」

ここには、仕事をしていく生き方と、主婦の生き方との間での彼女の心の揺れが現れている。

Ｂさんの母親は優しかったが、Ｂさんが高校生の頃、女の子の友達の家でも外泊は許さないなど、しつけは厳しかった。Ｂさん自身もちゃらちゃら着飾ったりするのは嫌いだった。高校ではワンダーフォーゲル部に所属し、山登りをしていた。

Ｂ、男子部、女子部があっても男の子に頼っちゃうとか、わりとこう女の子らしく振る舞って男の子の気を引くような人がいる中で、私はそうじゃなかったですね。で、部に入れば入ったなりに、「女子だからって甘えるな」みたいなことは言われましたし。…だからそう言われると一生懸命、山の本を読んで一人でテント張れるような練習をしたりして。

このようにＢさんは、男の子の気を引くような女らしさを嫌っていたという。が、一方では、Ｂさんは妹を羨む気持ちがあったことを、面接治療を通して気づいたと語っている。妹の方は、親の言うことを真面目にとらず、自由に羽目を外し、男の子とつきあっていた。Ｂさん自身、そのような女らしさを羨ましく思う面もあったのである。

面接治療をうけながら、Ｂさんは少しずつアルバイトができるようになり、ＰＯＰ（広告等のための文字や絵のデザイン）の講習をカルチャーセンターで受け始めた。

Ｂ、その講座が終わる頃に１つ仕事をいただいたんですよ。それがＰＯＰ専門にやっている会社の仕事で、すごく私としては魅力もあるしやりたいと思っていたんですけれども、ただその会社に初めて行って、帰りにもう駄目になっちゃったんです。もう疲れて貧血みたいの起こして、電車の中で。それでもう、それも諦めて。すごく自分ではやっぱりがっかりしましたけど。やっぱり自分は仕事はできないんじゃないかなと思って。でもその後で、結局最終的に勤めた仕事を紹介されて。そこはスーパーでまあ、週３日ぐらいの割で９時から４時ぐらいまでやってくれればっていう楽な仕事で。

Ｂさんは23歳の時に、このスーパーで勤め始める。

Ｂ、（会社では）パートのおばさんて感じの人が多いから、若い女の人ってすごく少ないんですよ。私なんか結構、チヤホヤされたほうで（笑い）当時は。…上の方にいる男の人なんか、結構優しくしてくれたり。…当時、私が一番いい思いをしたと思うんですけど、ええ。だから

その時は、そんなに女らしさを否定するっていうことはなかったですね。逆に今まで遊んでなかったから、とことん遊んでやろうと思って。ただ親がそんな風（真面目で堅い）ですから、泊まりでどっか行ったりとかできないですけど…残業した後で、今の夫と一緒にお酒飲みに行ったりとかということはしてて、当時はそれなりに遊んだんですね。…まあ12時頃に帰ってきたりとか。でも親は、やっぱり前と違って、もうさんざん私がそうやっていろんな思いをして、やっと普通っていうか、そういうところまで戻ったわけですから、あんまりその時、うるさく言わなかったんですよね。それで一応、夫を紹介したりなんかした時も…（Ｂさんの上司だったので）会ってすぐ信用しちゃったみたいな感じがあって。うん、もう一応デートも公認みたいな感じで。まあ親の方も、よっぽど間違いをしなければ、好きにやらせたいというのがあったんでしょうね、今までがあれでしたから。

現在Ｂさんは、この職場で上司だった人と結婚、出産、退職という過程を経て、３歳のお子さんを育てている。

ここまでのＢさんが辿った経路には、Ｂさんが拒食という体験を通して、キャリア・ウーマンか主婦かという心の揺れ、女らしさをめぐる揺れ、生まれ育った家族からの自立という問題に、自分なりの折り合いをつけていったことが現れているように見える。本人には非常に辛い体験であり、命に関わる体験であったが、無意識のうちにもＢさん自身がこの体験を使い、自分に最適な場を選んでいったようにも見える。

しかし、仕事か主婦かという心の揺れは、現在でもＢさんの問題として継続している。Ｂさんは、子育てだけに閉じこめられる苦しさを綴った橘由子さんの本（橘［1992］）にとても共感すると言う。

Ｂ、自分の夫と一緒に仕事してる人なんかもいますよね。もと一緒に仕事をしていて、夫はそのままどんどん仕事を続けていって偉くもなるし、同じようにお酒飲んで帰っても来るしみたいな感じで、自分だけがもう、なんか家庭の中に入っちゃうみたいな。それで夫は、大体もう産まれちゃうと母親任せですよね。…だから頭では、自分は別に家庭に入って子供の面倒見ていいんだなんて思っているんですけど、実際にやってみると、何で私ばっかりって思う時がすごくあるんですよね。二人で作った子供なのに、みたいな。それで昔だったら、それが女性の生き方みたいな感じで思われてたんですけど、今はすごく、女の人がもう、結婚するまでバリバリ仕事してるし、いろんなことやってるし、遊んでもいるし、それがなんか急にこうプツッとこう、ねえ社会から取り残されたみたいな感じっていうの、みんな今経験しているんじゃないかって思うんですよね。…まあ、ほんの何年かぐらい家庭に入ってもなんて思うんですけど、やっぱりとても私なんかはもう我慢できなくて。でもやっぱり仕事をするとなるとどうしても責任も出てくるし、子供預けるとか、あと子供が病気になれば休んだりするし、そういう問題もあるし。第一あの、再就職っていうのは結構難しいですよね、子供が小さいと。だからまあ、仕事には出られないんですけど。…やっぱり家にいるだけじゃこれからのお母さんっていうのは満足できないんじゃないかと思うんですよね。…どう考えても、家にいて家事・子育てやっているよりは、外に出ているほうが絶対にいいですね。おもしろいし。…ただ出産の時、そこまで分からないですから。…そんなに孤独っていうのがすごく深いものだなっていうのが

分からないですから。…子供と一緒の生活も、ほんとに何週間ぐらいだったらいいんですけど、それがずっと、1年、2年ってなると。…どこでも大体、美術展見に行きたいと思っても、お子さまはご遠慮下さいみたいなこと書いてあるし…私も考えると仕事止めない方が良かったかな、なんて今思っているんですけど、ええ。

Bさんは、ある母親グループに属して活動している。そこでの母親達の意見が、Bさんの言葉の中で増幅されている。子育てによって家に閉じこめられてしまう母親達の孤独や満たされなさが語られている。

Bさんが拒食で苦しんでいた当時、拒食症で苦しむ高校生が妹を殺すという事件が起こった。Bさんは、妹を殺すところまで追いつめられた高校生への同情の気持ちと拒食症への間違ったイメージが社会的にあると感じたことから、新聞に投書し、掲載されている。このようにBさんは、社会に対して敏感であり、社会と関わろうとする態度を持っている。そのため、幼児を育てることで仕事も持てず、社会から取り残されてしまわざるを得ないような、今日の育児の環境が、Bさんにとっては一層耐え難く感じられるのであろう。

Bさんのインタビューでの言葉や日記には、仕事をする生き方と主婦としての生き方という対立項が現れていた。また、男の子の気を引くような女らしさを嫌う気持ちと、若い女性としてチヤホヤされることを楽しみたいという気持ちとの両方が現れていた。(21)

前者の対立項から見ていこう。ここでは2つの事柄が現れていた。まず第一にBさんは、仕事をする生き方か、主婦の生き方か、という選択肢の前で揺れているのだが、この揺れには、社会的なメッセージが影響していたとBさんは感じている。Bさんのキャリア志向には、「女も外に出て仕事をした方がいい、男と対等にやっていくのがいい」という、当時の社会的なメッセージの影響があったとBさんは振り返っている。一方で、Bさんにとって主婦の生き方は、当時の日記に現れているように、母親という最も身近なモデルにそった生き方であった。自分は、母親のような主婦はできないと思う半面、体調を崩した自分を支えてくれた母親のありがたさを感じていた。現在、主婦として過ごしているBさんは、子供が小さいと仕事をすることが難しいと語るが、その言葉の中には、「小さい子供を持つ母親は、家庭で家事や育児をするものだ」ということを前提として組み立てられた社会の現実がうかがえる。女性は主婦として、家事や育児をする生き方が望ましいという規範は、このような社会のあり方と相互に支え合っていると考えられる。

第二に、Bさんの言葉には、現在の主婦としての生き方に満たされなさを感じていることが現れていた。Bさんは子供は可愛いし、病気の時には側にいてやりたいと語っている。しかし子供と二人での生活では満たされず、社会から取り残されたように感じている。家事や子育てよりは、外に出ている方が絶対にいい、その方が面白いと言う。Bさんにとっては、仕事をする生き方に比べて、家に閉じこめられてしまう主婦の生き方がつまらない、価値の低いものとして感受されている。これはBさん一人の感覚ではなく、幼い子供を持つ母親グループに集まる大勢の母親達に共通した感覚だと捉えられていることが、Bさんの言葉には現れていた。

女性も男性と同じように仕事をした方が良いというメッセージは、より抽象的なレベルで捉えると、「女性は男性と同じ価値基準で評価さ

れる」という規範として考えられる。女性は主婦として家事や育児をする生き方が良いというメッセージは、より抽象的なレベルでは、「女性は男性とは異なる価値基準で評価される」という規範として考えられる。Bさんの言葉に現れているように、今日の社会では、この両方の規範が働いているように女性達には感受されている。

このような抽象的なレベルで見れば、この両方の規範は、どちらも女性の抑圧ということに、直接結びつくものではない。しかし今日の社会では、現実に男性支配の構造がある。そしてこの社会においては、職場での仕事において能力を発揮し業績を達成することに価値があるとされ、それに対して経済的な報酬が与えられる。女性の担う家事や育児は価値の低いものとして位置づけられている。このような社会の現実の中で、「女性は男性と同じ価値基準で評価される」という規範は、女性であっても男性と同様に、仕事において能力を発揮し業績を達成することに価値があるという社会的なメッセージとなる。そして「女性は男性とは異なる価値基準で評価される」という規範は、女性は価値の低いものとされた家事や育児を負担し、家族を情緒的に支えるのが望ましいという規範となる。職場での仕事が高く価値づけられ、家庭での家事や育児は低く価値づけられる社会の現実を前提とした上で、「女性は男性とは異なる価値基準で評価される」という規範、「女性は主婦として家事・育児をし、家族を情緒的に支えるべきだ」という形で現れている規範が、女性にとって抑圧的なものとして感受されるのである。

2で見てきた主体性をめぐる規範の矛盾構造は、男性にも女性にもあてはまる。今日、男性も女性も自分が従う価値基準を選択することが出来るとされる。が現実には、自ら価値基準を選択することで、その裏から絡めとられていくという構造がある。このように絡めとられていくことにおいては、男性も女性も同様である。しかし男性の場合には、女性のように主婦か仕事かという矛盾に直面させられることはない。また男性が、絡めとられていく生き方は、多くの場合職場で能力を発揮し業績を達成するという生き方であり、これはこの社会で高く価値づけられている。しかし女性の場合は、仕事か主婦かという生き方の矛盾に直面させられる。また主婦という生き方を選択した場合、社会的に低く価値づけられる生き方に絡めとられてしまうのである。

Bさんの言葉には、仕事をする生き方と、主婦の生き方の間での揺れが見られた。また、現在の主婦としての生活には満たされなさを感じていることが現れていた。これらは、主体性をめぐる規範の矛盾に、女性性をめぐる規範の矛盾が重なっている構造の下におかれた個人の心の揺れであり、満たされなさであろうと考えられる。

後者の対立項、すなわち女らしさをめぐるBさんの心の揺れも、この女性性をめぐる規範の矛盾の下での心の揺れとして、考えることができる。Bさんは、ちゃらちゃら着飾ったり、男の子の気を引き、男の子に頼るような女らしさを嫌っていた。このようなBさんの態度は、「女性は男性と同じ価値基準で評価される」という規範にそった態度である。一方でBさんは、若い女性として楽しんでいる妹を羨ましく思った。またBさん自身、職場では、若い女性として扱われることを楽しむ気持ちもあったと語っている。このようなBさんの態度は、「女性は男性とは異なる女性らしさによって評価される」という規範にそった態度と見ることができる。女らしさについて、矛盾するような態度の

両方が、Bさんの言葉にはあらわれていた。

以上、仕事か主婦かという生き方をめぐって、また女らしさをめぐっての、Bさんの言葉の中に現れている女性性をめぐる規範の矛盾構造を、ここでの考察の第二番目の軸として取り上げよう。

4　身体性をめぐる規範の矛盾構造

摂食障害を経験した個人の言葉や手記には、当時、自己の身体をどのように感じていたかが現れているものがある。自己の身体をどのように感じていたかには、大別して、以下の2つのタイプが現れているように読みとれる。①自己の女性的な身体に対して否定的な感覚が抱かれる場合と、②自己の身体を女性の身体として、社会的に美しいとされる体型に合わせたいという感覚が抱かれる場合である。

①の場合から見ていこう。2で取り上げたAさんは、自分の身体について以下のように語っている。

A、いや、でも思春期とかそういうこと（死んでしまうのもいいんじゃないか、ということ）思いません？なんかこう透明なものに憧れるっていうか。生きてるって醜いじゃないですか、なんか、と思うんですよ、思春期の頃は。なんか、ものをバリバリ食べて。で、なんか健康的になって。その肉体性っていうのが、嫌だっていうのありますよね。

…

A、生理がないのはいいと思ってましたからね、その頃は。だから性とかが、嫌だっていうのもあるんじゃないですか、はっきり言えば。…性も食も。それは大きいんじゃないですか。その中性でいたいっていうの…大人になりたくないっていうのもつながると思うんですけど。

－胸なんかも…

A、だから、でも小さい方がいいって思ってましたね、そういえば多分。…ストンとした体、細くて、そういうのがいいと思ってた。妖精みたいな。ありますよね、俳優さんとかでもいるじゃないですか、そういう人って。

－性的なことに関しては、どう感じていらっしゃいましたか。

A、いや私、嫌だったですよ、多分。その中学の時、塾とかでみんなで話してたけど、私は、はっきり言って嫌だったような気がする。だからその話にはのっていけないみたいな。だから気持ち悪いと思ってたんですよ。…なんか、その死に憧れるみたいなのってありません？なんか、美しい死みたいな。ほんとは汚いのかもしれないけど、イメージとしては、透明な感じがしたりしません？なんかこう、生きて、食んで、競争して、生殖して、まあそれはいいと思うようになったけど、でもその頃はなんか、一番死ぬのに近く生きてるのが、だからあんまりものを食べないほうが、食べられる方にしてもいいっていうか。食べられる木とか肉とかにしてみても。そんなこと思ってたような…。最小限に生きるみたいな、そういうのに美を感じてたような気がするんですけど。だから植物みたいに、最小限に呼吸して、最小限に食んで生きるみたいなのにこう美を感ずるとか、あったような気がするんですよ。だから、ものを食べるのも嫌だとか…食べない方が美しいみたいな。

Aさんの言葉には、自分の身体の肉体性が嫌だという感覚が現れている。身体の肉体性の現れである性や食に対しても、嫌悪の感覚が抱かれている。透明なものや美しい死への憧れ、最

小限に食べることの美意識などを、Aさんは、思春期に特有な純粋さへの憧れだったと振り返っている。思春期に特有な心性として、Aさんが振り返っているこの感覚は、観念的なもの・理念的なものへの憧れ、精神的な存在であることへの憧れとしてとらえることができるだろう。自己の身体の肉体性を嫌悪し、精神的な存在であることに憧れるというAさんの言葉の中に、「人間は精神として評価される」という規範の極端な形での現れを見ることができるだろう。

次に、②のタイプの場合を見ていこう。専門学校に通っていた当時、ダイエットから過食になったCさんは、ダイエットにのめり込んでいった頃の感覚を以下のように語っている。

C、私、外見をすごく気にしてたんですよ。で、とにかくなんか痩せたいなって、ただ思ってて。…その頃って私ね、痩せてる人がいい人だっていう感覚が単純にあったんですよ。痩せてる方がいいって、人生は楽しいっていうのがあったんですよ。だから痩せている方が、例えば男の人にもてるとか、単純にそういうのが、ずっと頭にあって。とにかくコンプレックスがあったんですよ、太ってるっていうのが。

Cさんの言葉には、外見を気にし、とにかく痩せたいと感じていた、当時の感覚が現れている。人は外見で判断される、特に女性の場合は、太っているか痩せているかで判断されるとCさんは感じていた。このような社会的メッセージを、自分は好きだった男の子の言葉や、雑誌から受け取ったとCさんは振り返っている。議論を整理するために、このメッセージを、より抽象的なレベルで「人間は身体として評価される」という規範としてとらえておこう。

Cさんは、また以下のような自分の理想像を描いていたという。

C、だから、常に持ってる理想ってありますよね、痩せて、みんなから好かれて、頭が良くってって。そんな完璧な人は、あんまりいませんよね。みんな努力してたりするのに。そういうの、常に自分で理想を描いてるんですよ。

ーああ、それは、痩せてるのと、みんなから好かれるのと…

C、そう、それは全部、一緒なの。あとやっぱり優しくって。なんていうのかな、ほんとなんか絵にかいたヒロインじゃないけど、そういう理想が常に自分にあるんですよ。こうありたいっていう…。

ここではCさんが、痩せて、みんなから好かれて、頭が良くて、という理想像を1つのものとしてとらえていることが注目される。Cさんにとっては、痩せているという身体に関わることと、みんなから好かれて頭がいいという性格や精神に関わることとが、1つのこととして感じられている。

①でみてきたAさんの言葉には、「人間は精神として評価される」という規範の極端な形での現れがみられた。Cさんにとっても、性格の良さや、頭の良さといった精神的な側面での評価は、切り捨てることができないものとして意識されている。一方で、初めに見てきたように、Cさんにとっては、「痩せている」という外見での評価が非常に重要なものとして感じられていた。「人間は身体として評価される」という社会的なメッセージを、好きだった男の子の言葉や、雑誌を通して受け取ったとCさんは振り返っている。

このように精神としての評価と、身体としての評価の両方を、Ｃさんは意識している。そして身体としての評価は、Ｃさんにとって非常に重要なものとして感じられている。そのためＣさんの自己像において、精神としての評価と身体としての評価が１つのものとして重ね合わされる時、あたかも性格や精神が、身体の外見に現れているかのように、自己の身体の外見が一層の重要性をもって意識されたのではないかと考えられる。

ダイエットで順調に体重を落としていたＣさんは、祖母の看病のストレスがきっかけとなって、突然過食になる。
Ｃ、それでね、ある日、突然、御飯をバーッと食べて。それでね、食べてしまったっていう後悔、ありますよね。今まで自分がこうやって順調に体重落としてきたのが、「ああ、これで帳消しになっちゃうよ」っていう自分のあせりとね、食べてしまったっていう罪悪感みたいなのが一緒になっちゃってね、ちょっと精神的に不安定になっちゃったんですよ。それで、止まんなくなっちゃって。「あれ、なんでこんな止まんないんだろう、おかしい、おかしい」っていうのがそれからずーっと続いちゃって…。

ダイエットで15キロ痩せた体重が、過食によって10キロぐらい戻ってしまった。
Ｃ、それで今まで痩せて、１つ下のサイズの服を買ってたのが、また着れなくなりますよね。それが悲しくてね。感情がこういう揺れ動くっていうんですかね。常にこう、何て言うんだろう、うつ状態っていうんですかね。で、段々こう、人に会わなくなったりとかしてね。家の中でふさぎこんでいたりとかね。…一番ひどい時って、外に出れなかったんですよ。ほんとに一歩も。…で、自分はとにかく醜い醜いとかって思い込んでて…

以上の言葉には、Ｃさんにとっては、太ることは精神的な不安定やうつ状態をもたらすほどの重大なことであり、自分の全存在の否定であるかのように意味づけられていることが現れている。Ｃさんにとって自己の身体の外見は、自己像と強く関わったものであることが推測される。前述したように、身体の外見は、性格や精神をも現すものとして感じられていたことも、Ｃさんにとっての身体の外見の重要性を一層増大させたと考えられる。

ここでもう一度、①のＡさんのケースを振り返ってみよう。Ａさんの拒食は、結果的には、自分の食べたい欲望と争う修行のような意味づけをされていくのだが、減量のきっかけは、テレビの痩せたタレントや、周りの同級生のダイエットなどの影響であった。Ａさんの場合にも、Ｃさんと同じように外見での評価は意識されていた。外見での評価によって身体が意識されるからこそ、その肉体性への嫌悪の感覚が呼び起こされると考えられる。

以上のように、①のような感覚を抱く女性達の言葉にも、②のような感覚を抱く女性達の言葉にも、「人間は精神として評価される」という規範と、これと矛盾する「人間は身体として評価される」という規範の両方の影響が読みとれる。①のタイプの女性達の場合は、「人間は身体として評価される」という規範の影響により身体が意識されるからこそ、その肉体性を否定し、「人間は精神として評価される」という規範を極端な形で体現しようとすると考えられる。②のタイプの女性達は、「人間は身体として評価される」という規範を強く意識する。そ

して「人間は精神として評価される」という規範も同時に働いているため、精神を現すものとしての自己の身体の外見を、一層強く自分の存在と重ね合わせて感受すると考えられる。

このように両方のタイプの女性達の身体への感覚から読みとれる、身体性をめぐる規範の矛盾構造を、ここでの第三の軸として取り上げよう。身体性をめぐる規範の矛盾構造の中に置かれていることに関しては、男性も同様である。が、「人間は身体として評価される」という規範の働き方は、今日の日本社会において、男性と女性の場合では異なっていると考えられる。(22) 女性の場合は、身体の外見の美しさという点から、男性の場合よりも、一層強く、存在の全体を身体として評価されている。そのために女性の方が、身体性をめぐる規範の矛盾構造の影響を強く受けていると考えられる。

5　規範の矛盾構造が働く場

2－4で見てきた3つの軸での規範の矛盾構造が働く場について、個人のライフコースにそって、右の図のように整理して見ていこう。個人は、(生まれ育った家族における) 家庭という場に生まれ、学校という場と関わりを持つ。職場や、(結婚して作る家族における) 家庭という場と関わりを持つ場合もある。

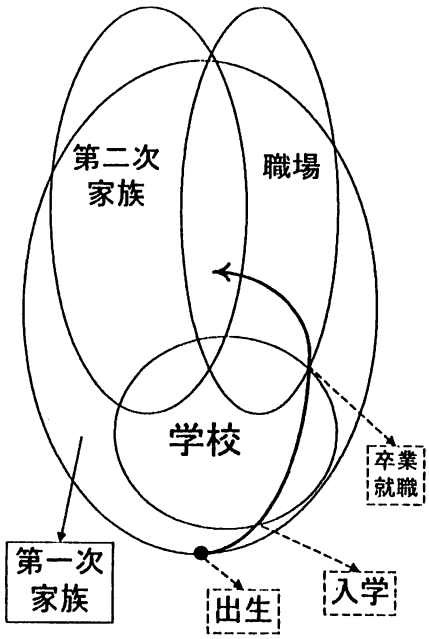
個人が生まれ育った家族を第一次家族とし、結婚して作る家族を第二次家族と記述しよう。

まず第一次家族という場について見ていこう。摂食障害の経験者の言葉には、第一次家族での問題が、自分の拒食や過食と関連させて語られている場合がある。これらのケースの中のある場合には、両親が規範の矛盾構造の影響を受けていることが、子供の摂食障害と関わって現れている。(23) 第一次家族での問題が語られている場合の考察は、別の機会に行いたい。

次に学校という場について見ていこう。個人は自分が生きる価値基準を選択することができるという規範は、今日、建て前としては共有されている。しかし学校という場では、特に進学を希望する場合には、与えられた課題を首尾よく達成し成果をあげるという態度が要請される。個人は自ら価値基準を選択しようとして、与えられた課題の達成の追求へと絡めとられてしまう場合がある。2で見てきたAさんの言葉の中には、このような主体性をめぐる規範の矛盾が現れていた。

職場においても、建て前としては、「自分が生きる価値基準を選択し得る主体」が望ましいのだとされるが、現実にはその場で必要とされる能力を発揮し、業績を達成し、組織が円滑に機能するために周囲の人間を気遣うという態度が要請される。

さらに女性の場合は、職場において以下のような困難さを経験する。一般職の女性達は、仕



事での業績達成に価値があるとされる中で、補助的な仕事を割り当てられ、賃金などの待遇において差別される。(24) 男性と対等のハードワークを要求される総合職や専門職の女性達は、他者を気遣う態度が身についているために強い主張ができず、ストレスにさらされる場合がある。(25) 摂食障害を経験した女性達の言葉には、職場において女性達が、「男性と同様に仕事において業績を達成することが望ましい」とされる一方で、「他者（特に男性社員）の仕事を補助し情緒的に気遣うことが望ましい」とされ、女性性をめぐる規範の矛盾に直面させられていることが現れている。

第二次家族という場では、個人は、夫は仕事、妻は家事・育児という性別役割分業に絡めとられていく。女性は、仕事をしている場合は、仕事も家事もという二重の負担を引き受けさせられることが多い。主婦の生き方を選ぶ場合は、職場での仕事に価値があるとされている社会において、価値の低いものとされる家事・育児を引き受けさせられて、満たされなさを感じる。３で見てきたＢさんの言葉には、後者の満たされなさが現れていた。主体性をめぐる規範の矛盾に重なって、女性性をめぐる規範の矛盾が感受されていることが、女性達の言葉の中には現れていた。

摂食障害を経験した個人の言葉の中には、第二次家族における、夫あるいは恋人との関係が語られている場合がある。その中には、夫や恋人との関係に、主体性・女性性をめぐる規範の矛盾が影響していることが現れている場合もある。(26) 第二次家族における夫や恋人との関係が語られている場合の考察は、別の機会に行いたい。

家庭・学校・職場といった場を通じて、個人は自己の身体と関わりを持つ。４で見てきたように、個人は身体性をめぐる規範の矛盾の中に置かれる。特に女性の場合は、その影響を強くうけ、自己の身体を意識させられることが、摂食障害を経験した女性達の言葉に現れていた。

６　規範の矛盾構造の〈主体化〉メカニズム

２で見てきたＡさんのケースにおいて、Ａさんは、受験校への進学・大学への進学という進路の選択を自分で行ったこととして語り、その選択が良かったのかどうか、苦しい選択をしてしまったかもしれないと自問している。２で見て来たように、Ａさんの言葉には、個人が、「自分が従う価値基準を選択する主体」であろうとすることにより、現実の条件の下で「主体的であってはならない」ことを強いられるという、主体性をめぐる規範の矛盾構造が現れていた。現実には、主体性をめぐる規範の矛盾構造から、Ａさんの苦しさがもたらされている。が、Ａさんには、自分の選択が良かったのかどうかということだけが意識されている。ここには、「主体的であれ」という規範、「個人は、自分が従う価値基準を選択することができる」という規範が、二重に働いていることが現れている。「主体的であれ」という規範が働くことで、現実には主体性をめぐる規範の矛盾構造があるにもかかわらず、個人は「自分が従う価値基準を選択し得る主体」なのであるから、その選択の結果については責任をおうべきだとされ、当人にもそのように意識されるのだ。このメカニズムは、注(24)の手記にも現れている。

これまで見てきたように、個人は、主体性・女性性・身体性をめぐる規範の矛盾構造の中に置かれることで、苦しみ、ストレスをうけてい

る。しかし、「自分が従う価値基準を選択し得る主体」として位置づけられることで、自己の行為や選択の結果については、自分で責任を負わねばならないとされ、自分自身もそのように意識する。こうして個人は、規範の重層的な矛盾構造によってもたらされた苦しみやストレスを、自己の責任として感受し、引き受けさせられる。このようにして個人は、主体性・女性性・身体性をめぐる規範の矛盾構造を〈主体化〉させられるのである。(27)(28)

この〈主体化〉メカニズムは、以上で見てきたように、主体性・女性性・身体性をめぐる規範の矛盾構造による苦悩を個人の責任として引き受けさせると同時に、規範の矛盾構造への批判の視点を閉ざすことによって、規範の矛盾構造を維持させるように働いているのだ。

註

(1) anorexia nervosa;痩せ願望や肥満恐怖からほとんど食べなくなり、ひどく痩せて無月経などを伴う。なおＤＳＭ－Ⅲ－Ｒ（アメリカ精神医学会の診断マニュアルの改訂版；1987年）では、以下のＡ－Ｄが、「神経性食欲不振症（anorexia nervosa)」の診断基準として挙げられている。

Ａ、年齢、身長に見合う正常体重の下限を維持することを拒否する。体重減少のため、標準体重の－15％以下の状態が続く。また、成長期の場合は、期待される体重にならず、標準体重の－15％以下となる。

Ｂ、標準体重以下であってもなお、体重が増えたり、太ることを強く恐れている。

Ｃ、体重や身長、体型に対する認識の仕方が障害されている。やせすぎているときですら、“太っている”と主張したり、明らかに標準体重以下の場合でも、体の一部が“太りすぎている”と思い込んでいる。

Ｄ、女性の場合は、ほかに原因がないのに３回以上続けて月経がない（一次性または二次性無月経)。(エストロゲンなどのホルモン投与後のみ月経がみられる場合は、無月経と考えられる。)

(2) bulimia nervosa;短期間に多量の食物を急速に摂取するむちゃ食いを反復するが、嘔吐や下剤の乱用をして痩せている場合が多い。

なお、ＤＳＭ－Ⅲ－Ｒ（1987）によれば、「神経性過食症（bulimia nervosa)」の診断基準として、以下のＡ－Ｅが挙げられている。

Ａ、むちゃ喰いのエピソード（多量の食物を急速に摂取する時間帯が、他とはっきり区別される）の反復。

Ｂ、むちゃ喰いの時間中、摂食行動を自己制御できないという感じがある。

Ｃ、患者はいつも体重増加を防ぐために、自己誘発性嘔吐、下剤や利尿剤の使用、厳格な食事制限または絶食、または激しい運動を行う。

Ｄ、少なくとも３ヶ月間に、最低１週間に平均２回のむちゃ喰いのエピソード。

Ｅ、体の形や体重についての関心のありすぎが持続。

(3) 厚生省による医療施設の調査では、1976年に１施設の摂食障害の平均患者数は、外来で8.1人、入院で2.8人だったものが、1981年には、外来で16人、入院で4.5人と、増加していることが明らかにされている。(anorexia nervosaの第一次全国調査厚生省特定疾患・中枢性摂食異常調査研究班「1981年度研究報告書抜粋」）摂食障害についての医学的な報告は17世紀からなされているが、世界的に見ても、症例の急激な増加は、第二次大戦後から、特に1960年代以降である。数値の変化を直接に患者の増加と結びつけることはできず、摂食障害という病の知名度、治療者の側の受け入れ態勢の変化などを考慮しなければならないが、近年増加の傾向

にあるということは、言えるだろう。

(4) 鈴木によれば、欧米での男性例の頻度は約1割であり、日本での頻度もほぼ同じである。(鈴木 [1983: 115])

(5) 摂食障害の経験者自身の語りを見ていくというやり方は、宮淑子、浅野千恵らも採用している。(宮 [1988]) (浅野 [1993])

(6) 生物学的観点では、摂食行動の中枢調節機構や、摂食調節物質が明らかになってきたが、まだ多くの部分は仮説にとどまっている。(粟生 [1985]) (粟生 [1991])

(7) 精神力動的解釈では、ブルックとパラツォーリの理論が注目される。ブルックは、anorexia nervosaの患者達の中心的な問題として、「内的な無力感」を指摘し、その形成に幼少期からの両親との「相互作用の型(パターン)」が関わっていると指摘している。(Bruch [1978 = 1979: 56-59]) パラツォーリは、対象関係論に基づき、「anorexia nervosaの患者は、幼児期に母親と悪い体験を重ねてきており、しかも母と自分の分離が出来ていないため、自分の身体を、母と同等の否定的な特徴を持つbadな存在と考える。思春期に、第二次性徴の出現によりますます母親に似てしまうという矛盾葛藤に直面し、彼女らは、幼児的な母子未分化状態に退行し、身体の成長をくい止めようとして、拒食に陥る」と主張する。(馬場・遠山 [1991: 41])

(8) 行動理論モデルは、人間の行動は、過去及び現在において受けた強化刺激の産物であるという考えに基づき、anorexia nervosaを食事恐怖症としてとらえ、「食べることに関連した不安を脱条件づけによって取り去り、食べることに伴う強力な強化刺激を与える」という治療法を提唱する。(Minuchin [1978 = 1987: 27-28])

(9) 認知行動論的モデルは、ある個人の情動や行動と、その個人が自分自身や周りの世界をどのように感じ、また自己の未来の可能性をどのように受けとめ、解釈するかということが相互に強く影響を与えているという前提から出発する。そして患者が自分の非機能的で非合理的な思考に気づき、その思考と行動を吟味し、より機能的・適応的に対処できるように援助することを治療の目的とする。(小牧・玉井 [1991: 180])

(10) 家族システム論では、ミヌーチンの主張が注目される。ミヌーチンはanorexia nervosaの家族に、絡み合い関係(家族交流が極端に緊密で頻繁に行われる)、過保護(家族員がお互いの幸せに大きな関心を示す)、硬直性(家族が現状維持に固執する)、葛藤が解決されないこと(家族に特有の葛藤回避の方法がある)の4つの特徴があり、さらに症状を持つ子供が両親の葛藤にまき込まれることがあると指摘した。(Minuchin [1978 = 1987: 42-46])

(11) 嗜癖モデルは、摂食障害を学習された行動としてとらえる。ホワイト夫妻は、過食浄化行動を行う患者をブリマレキシアという概念でとらえ、女性が社会に進出していく過程で学習された行動と考える。(Boskind-White [1983=1991: 8-9]) 斎藤学は、過食・浄化を、アルコホリズムや薬物依存と同型の食に関する嗜癖行動ととらえる。(斎藤学 [1989b: 35])

(12) 社会文化的解釈については、純粋に医学的な領域においては「痩せ文化」や「女性役割の変化」の指摘にとどまり、深められた考察はあまりなされていない。摂食障害の社会文化的背景については、むしろ医学的解釈を批判するフェミニズムの立場にたつ理論によって、より深い考察がなされ、それが医学的解釈の中にも取り込まれつつある。(例えば(Vandereycken & Meermann [1984 = 1991: 63-65])など。)

(13) オーバックは「一見驚くほど多くの社会的可能性が開かれている」「少なくともそういう神話が流布している」が、「女性の不平等が相変わらず続いている」現代社会を生きる女性達の緊張が、「無食

欲症」に象徴的に現れていると考える。そして内的には母－娘関係を通して形成されてきた女性の身体に対する不安が、食物や女性の身体に関する社会的な状況と結びついて一層増大し、これが「無食欲症」の土台となると主張する。(Orbach [1986=1992])

(14) ホワイト夫妻は、過食浄化行動をとらえるためにブリマレキシアという概念を作り、「習慣となっている過食浄化行動、そして完全癖、食物と身体のサイズに対する強迫的関心、低い自己評価、自分を押し殺してでも他人に気に入られようとする過度な構えという心的力動を持つもの」と定義した。ホワイト夫妻は、ブリマレキシアの生活様式と価値観を促す、社会文化的な要因について指摘している。(Boskind-White [1983=1991]) (注(21)参照)。

(15) 斎藤学は、過食と拒食の２つがなんらかの形で主題となっている疾患を「過食・拒食症」と呼び、「食に関する嗜癖」としてとらえ、その基底には関係嗜癖があるとする。(斎藤学 [1993a])(斎藤学 [1993b]) (注(21)参照)。

(16) 加藤秀一は、女性の社会的な地位が強いる〈従属〉と、アルチュセールの定式化する〈主体化＝服従〉との絡み合いという観点から、以下の主張をする。「女性役割とは、他人の欲望を自己の欲望に優先させ、他人の欲望（を満たすこと）を自己の欲望とすることである。この欲望の対象・用法に関わる規範の様態が〈従属〉であり、経済的依存や地位・資源の不均等な配分と結びついた女性役割そのものである。(『家族』というイデオロギー装置の下で) 女性にとって、〈主体〉となることは『欲望をつねにすでに自己のものとして再認することが必要なのに (〈主体化〉)、そのプロセスが方向づけられている終着点は、自己の欲望は他人の欲望の関数でしかないような存在形態である (〈従属〉)』というものであり、〈従属〉に向けて〈主体化〉に挫折し続けるという循環的な構造に絡めとられる。拒食症は究極的にはこうした次元に基礎を持つ。」(加藤秀一 [1993])

(17) 浅野は摂食障害の経験者へのインタビューから、「『女らしさ』が『自分らしさ』や『人間らしさ』と対立するように社会的に構成され、その二者択一が女性個人に迫られている」と指摘し、「摂食障害を意味づけてきた医学的な営みも、ジェンダーという知の構造により生み出されており、女性達を摂食障害へと導く社会的な力と不可分なのだ」と論じている。(浅野 [1993])

(18) インタビューは、浅野 [1993]の方法に基づいて、公民館・女性センター・雑誌等に、「摂食障害の体験を話してくれる方を募集しています」というビラの掲示や記事の掲載をお願いし、1993～1994年に６人の方に会ってお話を伺った。

(19) この論文では、インタビューの事例を中心に取り上げているが、以下で挙げる摂食障害を経験した個人へのルポルタージュ、インタビュー集、体験手記、自助グループへの投稿なども考察にあたり参照している。斎藤茂男の『飽食窮民』(斎藤茂男 [1991]) ・嶋村久子の「過食・拒食をする少女たち」『少年犯罪論』(芹沢俊介編 [1992]) のルポルタージュ。インタビュー集『あかるく拒食ゲンキに過食』(伊藤比呂美・斎藤学[1992]) での記述。ＮＡＢＡ（斎藤学が創設に関わった摂食障害者のための自助グループ）発行の「いいかげんに生きよう新聞」への投稿。「自分を振り返って」(中村 [1986]) (『思春期の拒食症と過食症』　現代のエスプリNo.232) の体験手記。

(20) ここでの主体性の概念は、真木 [1993]の定義を参照した。真木は、「主体性」を、目的を含めて自ら決定する「テレオノミー的な主体性」と、目的はあらかじめ他者によって定められており、それを代理人として達成する「エージェント的な主体性」とに区別している。(真木 [1993: 83-84]) こ

の概念で記述すれば、「テレオノミー的な主体性」が前提とされながら、現実には「エージェント的な主体性」が要請されることが、主体性をめぐる規範の矛盾としてとらえられる。

(21) ここで取り上げている対立項については、ホワイト夫妻や斎藤学、浅野千恵らが言及している。ホワイト夫妻はブリマレキシアの背景として、女性は、「学問に秀で、魅力的で活動的な社会生活を営むこと」を期待される一方で、「男性にとって魅力的な女性になること」が期待され、葛藤的な状況に置かれることを指摘している。(Boskind-White [1983 = 1991]) 斎藤学は、「他人（男）に『憧れられる存在』でありたい」という自我理想と、「パワーによって自己を律し他者を屈服させ、自然をコントロールしよう」という自我理想という、今日の女性の２つの自我理想のあり方が、過食・拒食症には反映されていると指摘している。(斎藤 [1993a]) 浅野千恵は、摂食障害を経験した女性達へのインタビューから、「女らしさ」と「自分らしさ」の相克を抽出している。(浅野 [1993])

(22) 男性と女性では、個人の評価基準における外見の重要さが異なるということは、例えば結婚相手に求める条件を尋ねる調査において、女性が相手の「経済力」や「職業」を重視するのに対して、男性は「容姿」を重視する割合が高いことにも現れている。(厚生省出生動向基本調査、1992年７月実施) 加藤 [1995:165]参照。

(23) 例えば、嶋村久子「過食・拒食をする少女たち」(芹沢編[1992]) では、過食嘔吐により新聞社を退職した知枝が、「会社の経営に邁進し、事業を拡張することに価値がある」と考える両親の家で、緊張して気が休まらず、過食嘔吐を繰り返すというケースが紹介されている。(嶋村 [1992:109-113])

(24) このような立場にある女性達が受けるストレスは、例えば以下のような投稿に現れている。(ペンネーム「ガラスのバラ」「いいかげんに生きよう新聞」no.56 1992年6月10日の投稿より)

「私は公立大学卒業のくせに、何の免状も資格も持たず、今の会社ではお茶くみと伝書鳩をやっている。情報関係の業種なので、時たま接する取り引き先の女性は単なる事務補助ではなく、一人前の仕事を任されている人が多い。つまり、マスコミによく出てくる専門職。本当の意味でのキャリア・ウーマンが多い。したがって彼女たちと私の対比は、よけいハッキリしてしまう。せめて、もっと地味な業種（業界）の会社に入るべきだったと、後悔すると共に、『私は一体何をやっているんだろう』と胸がしめつけられる。『みじめったらしい』とか『みすぼらしい』というたぐいの形容詞が、ぼろぼろ出てくる状態なのだ。…」

(25) このような立場にある女性達のストレスは、例えば以下のような投稿に現れている。(ペンネーム「真由美」「いいかげんに生きよう新聞」no.35 1990年7月20日の投稿より)

「…今の私はどういう状態かと言いますと、とても休みたいという気持ちです。私は「自立する女性」「個性のある女性」等、人に認められたい、一目置かれたいという気持ちでグラフィックデザイナーという職業につき、休みなく働いています。仕事をやっている自分は不安でなりません。その不安をなくすために食べ、過食をします。現在ある程度仕事で認められ、会社で責任のある仕事についていますが、とっても疲れているのです。充電したい。私は男性と対等に仕事をやっていく強さはありません。私はとてもあたり前の平凡が嫌でした。けれど今は、その平凡な時間に余裕のあるごく普通の生活がしたい。弱くて大人しい私は、競争の世界では傷つきやすくてエネルギーを使いすぎるのです。けれど今は、会社にやめるということが言えない弱い私なのです。自分の心はこんなに弱っていて、身体もボロボロなのに、どうして仕事を辞められないのかしら？どうにかしたい。

身体がかわいそうだから。私は自分自身に無理ばかり押しつける。私は仕事で成功することは、大切な事ではないみたい。私の心を本当に満たしてくれるのは、仲間とのふれあい、家族とのふれあい、日常生活とかスポーツだと思う。とても憧れた自立した女性、すてきな女性、雑誌に載っている女性達とはちがったところで私は感じるみたい。今言えることは、仕事だけの私は、私にとってとてもかわいそうだと言う事。過食との直接の話ではないけど、やりすぎる、他人の期待を裏切れない、プライドが高い、などは私の今の生活にとても深く関わっています。…」

(26) 例えば斎藤茂男 [1991]のルポルタージュでは、「夫との関係に不安や満たされなさを感じながらも、夫に経済的に依存できることに魅力を感じ、夫に好かれる可愛い奥さんになろうともがいていた」と語る奈美子のケースが取り上げられている。(斎藤 [1991: 263-278])

(27) 規範の矛盾構造の〈主体化〉メカニズムの発想は、加藤まどか [1993]の執筆にあたり、見田宗介先生に御教示いただいた。

(28)「社会的に形成された葛藤的な状況を、摂食障害に陥る個人の問題であるとして解釈させる力が働いている」という点については、浅野 [1993]も指摘している。(浅野 [1993: 27, 31, 39, 59-60])私は、それが「『主体的であれ』という規範の作用による自己責任化」としてなされているのだと考える。

(＊) 本論文は、加藤まどか [1993]をもとに書き直したものである。インタビューに応じて、個人的なことを話して下さった方々にお礼を言います。加藤まどか [1993]は、東京大学大学院見田ゼミでの議論により触発され、論文全体の構成について見田宗介先生にアドバイスをいただいた。また本論文については、解釈研での議論を参考にしている。コメントをして下さった方々に感謝します。

【参考文献】

浅野千恵　1993　「摂食障害とジェンダー」お茶の水女子大修士論文

粟生修司　1985　「病態生理からみた神経性食思不振症の病因―神経生理学的考察」末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一編　『神経性食思不振症』医学書院

――――　1991　「神経性過食症の病因　1、病態生理の側面から」末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一編『神経性過食症』医学書院

伊藤比呂美・斎藤学　1992　『あかるく拒食　ゲンキに過食』平凡社

上野千鶴子　1990　『家父長制と資本制　マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店

加藤秀一　1993　「ジェンダーと摂食障害（1）」明治学院論叢

加藤まどか　1993　「現代日本社会の規範の矛盾構造の分析―摂食障害の事例を手掛かりとして―」東京大学大学院社会学研究科修士論文

――――　1995　「『きれいな体』の快楽―女性誌が編み上げる女性身体」上野千鶴子他編『ジェンダーの社会学』岩波書店

小牧元・玉井一　1991　「認知行動療法」末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一編『神経性過食症』医学書院

斎藤学　1984　『嗜癖行動と家族』有斐閣

————・波田あい子編　1986　『女らしさの病い』誠信書房
————1988　「嗜癖」『異常心理学講座第５巻』みすず書房
————1989a　『家族依存症』誠信書房
————1989b　『過食・拒食症とはなにか』ＣＩＡＰ出版
————編　1991　『カナリヤの歌　上・下』動物社
————1993a　「嗜癖としての過食症，そしてその回復過程における自助グループの機能」精神科治療学vol8, no3
————1993b　『生きるのが怖い少女たち』光文社
斎藤茂男　1991　『飽食窮民』共同通信社
嶋村久子　1992　「過食・拒食をする少女たち」芹沢俊介編　『少年犯罪論』青弓社
下坂幸三　1988　『アノレクシア・ネルヴォーザ論考』金剛出版
鈴木裕也　1983　『神経性食欲不振症』女子栄養大学出版部
————　1986　『彼女たちはなぜ拒食や多食に走る』女子栄養大学出版部
橋由子　1992　『子どもに手を上げたくなるとき』学陽書房
中島梓　1991　『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房
中村葉子　1986　「自分を振り返って」馬場謙一編　『思春期の拒食症と過食症』現代のエスプリno.232至文堂
馬場謙一・遠山尚孝　1991　「神経性過食症の病因２　病態心理の側面から」末松弘行・河野友信・玉井一・馬場謙一編『神経性過食症』医学書院
真木悠介　1993　『自我の起源』岩波書店
宮淑子　1988　『「女」なんていや！思春期やせ症を追う』朝日新聞社
森川那智子　1991『みんな、やせることに失敗している』ＪＩＣＣ出版局
Boskind-White, Marlene & White, William, C.Jr. 1983 Bulimarexia=1991　杵渕幸子・森川那智子・細田真司・久田みさ子訳『過食と女性の心理』星和書店
Bruch, Hilde 1978 The Golden Cage, Harvard University Press=1979　岡部祥平他訳『思春期やせ症の謎』星和書店
Crisp, Arthur Hamilton 1985 Anorexia Nervosa-let me be-, Academic Press=1985　高木隆郎他訳『思春期やせ症の世界』紀伊国屋書店
Minuchin, S./Rosman, B.L/Baker, L. 1978 Psychosomatic Families, The President and Fellows of Harvard College=1987 福田俊一監訳『思春期やせ症の家族』星和書店
Orbach, Susie 1986 Hunger Strike, W.W.Norton=1992 . 鈴木二郎他訳『拒食症』新曜社
Palazzoli, Selvini.M 1978 Self-Starvation, Aronson
Vandereycken, Walter/Meermann, Rolf 1984 Anorexia Nervosa, Walter de GRUYTER&Co.=1991　末松弘行監訳『アノレクシア・ネルヴォーザ』中央洋書出版部

（かとう　まどか）